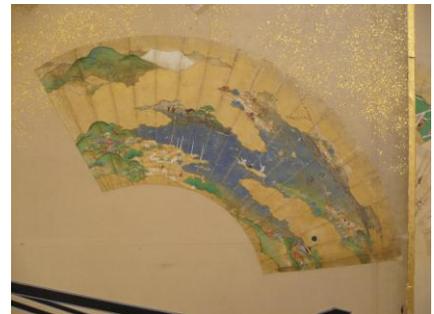


卒業記念展示：源氏物語扇面貼交屏風（6曲1双）



濃彩の細やかな源氏絵と金銀泥芦手風下絵の詞書各15面、金揉箔散らし地の余白には立部が描かれ、屏風に気品と奥行きとを添えています。

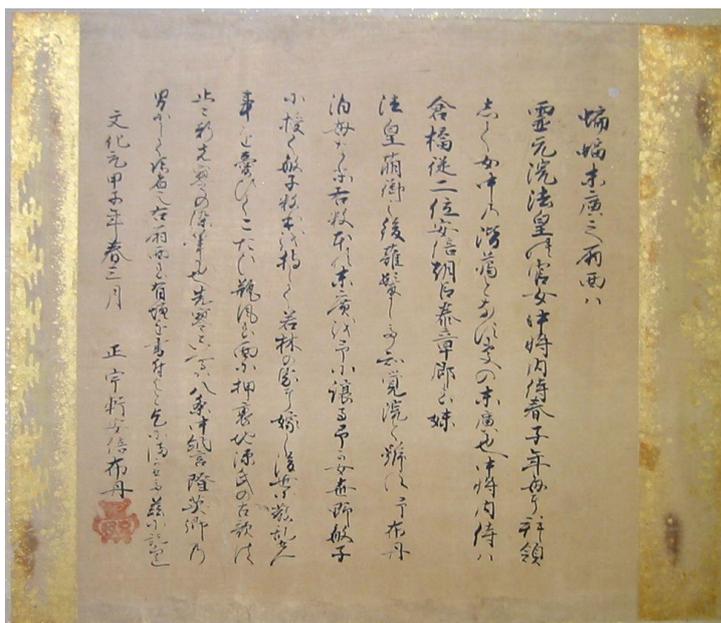
まず見ていただきたいのは、実際に扇として使われたものを貼り込んでいること。源氏絵屏風の作例は決して少なくはありませんし、扇面型源氏絵もめずらしくはないでしょう。しかし、実用に供された扇が残ることは非常に稀なのです。さらに、とても興味深いその制作事情。左隻の由緒書とその他の資料をつきあわせると、おおよそ次のようなことがわかります。



江戸時代中期の宮廷に、中将内侍あるいは中将局と呼ばれた女房がおりました。実名は春子。家禄150石、陰陽道を専らとする安倍泰章（1687～1754）の妹ですから、あまり高い家柄の出ではありません。しかし英邁な君主として知られる霊元天皇（1654～1732）に愛され、男宮を生みます。この宮は、後に実相院門跡となり峯宮とも顕明院宮とも呼ばれましたが、正徳3年（1713）わずか5才で亡くなっています。中将内侍は、おそらく霊元天皇が上皇となってからお側に仕えたのでしょう。親子ほど年齢の差があったと思われます。天皇は、出

自の低い寵愛の女房に毎年源氏絵の扇を賜り、彼女の弱い地位の支えとしたようです。その扇こそ、私たちが今日にしているものにほかなりません。このような時期・場所・下命者など制作事情が具体的にわかる源氏絵屏風は、まったく希有の例なのです。

享保17年霊元天皇が崩御されますと、中将内侍春子は出家して尼となり、思い出の扇を甥（号、布丹）に譲ります。布丹はさらにわがむすめへ贈ろうとして、散佚を恐れ屏風に仕立てました。こうして300年近い時間を超え、江戸時代宮廷の文華が確かに伝えられることとなったのです。



[げんじ ものがたり せんめん はりませ びょうぶ 文化元年(1804)制作]

【翻字】

蝙蝠末廣之扇面は

靈元院法皇の中将内侍春子年毎に拝領

して女中の階牖となす^(處) 処の末廣也中将内侍は

倉橋従二位安倍朝臣泰章卿之妹

法皇崩御之後薙髮して知覚院と号す^(號) 予布丹

伯母なり右数本の末廣を予に譲る予か女世野敏子

に授く敏子数本を持して若林の家に嫁し後世に散乱せん

事を憂ひてこたひ^(屏) 瓶風の面に押裏地源氏の古歌は

止々軒先寥の染筆也先寥といへるは八条中納言隆英卿の

男にして陰者也右扇面の有増を書付よと乞にまかせて茲に記而已

文化元甲子年春三月

正宇軒安倍布丹

- 1 -

【校訂本文】

蝙蝠末廣の扇面は

靈元院法皇の中将内侍春子、年毎^{としごと}に拝領

して女中の階牖となす^(處) 処の末廣也。中将内侍は

倉橋従二位・安倍朝臣泰章卿の妹、

法皇崩御の後、薙髮して知覚院と号す^(號)。予布丹の

伯母なり。右数本の末廣を予に譲る。予が女、世野敏子

に授く。敏子数本を持して、若林の家に嫁し、後世に散乱せん

事を憂ひて、今度^{こたひ}瓶風の面に押す。裏地の源氏の古歌は

止々軒先寥の染筆也。先寥といへるは八条中納言隆英卿の

男にして陰者也。右扇面の有増^{あらまし}を書付よと乞にまかせて、茲に記而已^{のみ}。

文化元甲子年春三月

正宇軒安倍布丹

- 2 -